

協働的な学びを育む音楽づくりの試み —和太鼓を用いた小学3年生の授業から—

岡 林 典 子 佐 野 仁 美 坂 井 康 子
(児童学科教授) (京都橘大学) (甲南女子大学)

山 崎 菜 央 南 夏 世
(附属小学校教諭) (神戸海星女子学院大学)

本研究では、和太鼓を用いて音楽づくりを試みるプログラムを通して、小学校第3学年の児童たちに協働的な学びが育まれるのかを、授業の参観と、ワークシートと振り返りシートを用いて、「工夫した点」「楽しかった点」「難しかった点」の3つの観点から検証を進めた。その結果、和太鼓を用いた音楽づくりの授業において、協働的な学びは育まれることが示唆された。

キーワード：協働、音楽づくり、和太鼓、小学3年生

1. 研究の背景

平成29年3月に小学校学習指導要領が告示された。平成29年6月に公表された『小学校学習指導要領解説 音楽編』¹⁾では、総説において音楽科の「改訂の趣旨及び要点」が示され、改訂の基本的な考え方として、「音楽に対する感性を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり…できるように、内容の改善を図る」「生活や社会の中の音や音楽の働きについて意識を深める学習の充実を図る」「和楽器を含む我が国や郷土の音楽の学習を図る」などが明示された。

これらの考え方に沿った具体的な学習内容の改善点の1つとして、これまで第5学年及び第6学年において取り上げられてきた和楽器が、第3学年及び第4学年に引き下げられたことが挙げられる²⁾。また、今回の改訂では教科の目標と学年の目標が整理され、育成を目指す資質・能力が、(1)「知識及び技能」の習得、(2)「思考力、判断力、表現力等」の育成、(3)「学びに向かう力、人間性等」の涵養、の3つに示された。中でも、(3)「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標では、全学年において「協働して音楽活動をする楽しさ」を感じること(低

学年及び中学年)や味わうこと(高学年)が挙げられ、教育課程全体を通して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める上でも、「協働」はキーワードとなる。

一方、権藤(2019)は、「我が国や郷土の音楽」に関する学習の充実が、課題と改訂の方針として示されることは、西洋由来の「見方・考え方」を自明の前提とする日本の音楽教育の歪みであることを指摘している。さらに、2015年発行の小学校教科書の2社ともが日本の伝統的な音楽に関わる頁数が1割にも満たなかったことや、2020年発行の教科書においても大きな変化がないことを挙げ、「西洋音楽ベースの『音楽性』を自明のものとして次の10年の音楽科指導が行われようとしている」ことを示唆している³⁾。

他方、和楽器の扱いが小学校3、4年へと拡大され、我が国の音楽文化や伝統に関する教育の改善が図られようとしているが、音楽的な素地形成に重要な時期である小学校3年生までの10年間についてはどう考えるべきであろうか。音楽教育の出発点からの議論や検討が抜け落ちているのではないか。

筆者らは、乳幼児期を「音楽的な素地をしっ

かりと育む時期」として捉えており、共に音楽教育と表現教育に携わる者として、幼児期に育まれる資質・能力を小学校の各教科の学びへと系統的につなげる音楽活動の可能性について話し合いを重ね、実践に基づき研究を行ってきた。これらの研究では、子どもたちが獲得しつつある日本語をもとに、音楽的視点から絵本やわらべうた、遊び歌を教材として、「かけ声」「唱えことば」「オノマトペ」などに着目し、音楽表現活動の成果を提示してきた⁴⁾。

これら幼児期と小学校低学年の接続期のプログラム開発と実践の成果を踏まえて、本研究では、さらに小学校中学年の子どもたちへとつながる試みとして、和太鼓を用いた音楽づくりにおいて協働的な学びを育むことができるのかを検証する。

対象児は、これまで幼稚園年長時にマラカスづくりを経験し、素材選びにおいて音の探索を主体的・協働的に繰り返し、素材や振り方、持ち方の違いによる異なる響きに気づきを得てきた⁵⁾。また、聴覚と視覚を統合した表現の試みとして、日本に古くからある和楽器（音質の異なる3種の楽器として鉦・祭り太鼓・拍子木）を用いて、「楽器の音を描く」ことを経験している⁶⁾。楽器の見えない位置で3つの音を聴き、それを色と形で表すという活動である。子どもたちは音の印象を色や形だけでなく、「かん」（鉦）、「とん」（太鼓）、「ばん」（拍子木）などのオノマトペでもとらえていた。

続く小学校1年生の7月の授業では、日本三大祭である祇園祭のお囃子のCDを聴いた後に、授業者（山崎）の打つ鉦の音をオノマトペで表すことを試みた。子どもたちは、関西在住の大人が祇園囃子を表す「コンチキチン」というオノマトペではなく、「トンチチチ」「チンキキキ」「カンカカカン」などユニークなオノマトペで表現していた。さらに小学1年生の3月には、締太鼓、平太鼓、祭太鼓、鈴、チャップ、拍子木、鉦など7種の和楽器の音をオノマトペで表し、それぞれの楽器のリズムを決めて声を合わせる授業を行った。

これに続いて2年生では、1年生時の経験を

広げるために、祇園囃子の楽譜を知り、唱歌を覚えて祭り囃子の合奏を試みる授業を、祇園祭の開催される7月に行った⁷⁾。

こうして、幼稚園年長クラスの子どもたちは、小学2年生まで3年間にわたり断続的に和楽器に触れる経験を重ねて小学3年生になった。本研究では、3年生になった児童たちを対象に、和太鼓を用いた音楽づくりの試みを通して協働的な学びを育むことができるのかを検証する。

2. 研究の目的・方法と実践の計画

2.1 研究目的

和太鼓を用いて試みる音楽づくりのプログラムを通して、小学校第3学年の児童たちに協働的な学びが育まれるのかを考察することを目的とする。

2.2 研究方法

第3学年の授業を全2時間で行う。

<研究対象> A 小学校第3学年2クラス 81名
<実践日> 第1時は2021年3月8日、第2時は3月10日と11日

<手続き>

全2時間で構成された授業の様子をビデオカメラ3台で、3方向から動画撮影するとともに、写真と筆記による記録も加えた。これらの録画資料、写真、授業で配布するワークシートと振り返りシートに記入された内容をもとに分析・考察を進める。

<分析・考察の視点>

授業での児童たちの様子と、記録した動画データ、ワークシートと振り返りシートに児童が記入したリズムフレーズや感想をもとに、協働的な学びが育まれたかを検討する。また、同様のデータをもとに、和太鼓を用いた音楽づくりにおいて、児童たちがどのような気づきを得たのか、どのような思いで音楽を作ろうとしたか、音を奏でようとしていたのかという視点から分析・考察する。

2.3 授業の準備：教材について

児童たちが口唱歌を唱えながら太鼓の打ち方

1) $\text{♩} \text{♩} \text{♩} \text{♩} \mid \text{♩} \text{♩} \text{♩} \text{♩}$
 $\text{○} \text{△} \text{○} \text{△} \text{○} \text{△} \text{○}$

2) $\text{♩} \text{♩} \text{♩} \text{♩} \mid \text{♩} \text{♩} \text{♩} \text{♩}$
 $\text{○} \text{△} \text{○} \text{△} \text{○} \text{△} \text{○} \text{△} \text{○}$

3) $\text{♩} \text{♩} \text{♩} \text{♩} \mid \text{♩} \text{♩} \text{♩} \text{♩}$
 $\text{○} \text{○} \text{△} \text{○} \text{○} \text{△} \text{○} \text{△} \text{○}$

グレードアップ!! ちょっと難しいリズムにも挑戦しよう。

4) $\text{♩} \text{♩} \text{♩} \text{♩} \mid \text{♩} \text{♩} \text{♩} \text{♩}$
 $\text{○} \text{△} \text{△} \text{○} \text{△} \text{○} \text{△} \text{△} \text{○}$

図1 4種類のリズムフレーズ

■みなさんも作ってみましょう。
選んだ番号 ()と()

選んだリズムを書いてみよう。
かけ声を考えて、考えて入れてみよう。

2つのリズムを選んだ理由

[]

図2 ワークシートの下半分

《和だいこ》合そうのふりかえり
 年 組 名前:

【和だいこを学習してどんなことを感じましたか】

【くふうしたところ】

【おもしろかったところ・楽しかったところ】

【むずかしかったところ】

図3 授業の振り返りシート

の基本を知り、リズムのまとまりを感じて演奏するためにはどのような教材をつくるのが良いかを、岡林・佐野・坂井・南の4名で話し合った。その結果、落ち着いた良い8拍を基本リズムとする4種類のリズムフレーズを決め、南が作成した楽譜を掲載してワークシートを用意した(図1参照)。また、ワークシートの下半分には、音楽づくりのために2つのリズムフレーズを選んでつなげるためのスペースを取った(図2参照)。

加えて、児童たちが授業からどのようなことを感じたのか、太鼓を打つにあたりどのような工夫を試みたのかを知るために、振り返りのシートを作成した(図3参照)。

2.4 授業計画について

先にも述べたが、対象児童は約半数が内部進学であり、幼稚園在園時に筆者らと和楽器の音を聴く経験をしている。また、第1学年、第2学年では筆者らとともに祇園囃子を題材とした和楽器に触れる授業を体験した。さらに、本研究の第1時の授業の3日前に全校音楽会が開催され、3年生の児童たちは、5年生の和太鼓を含んだ合奏を憧れをもって視聴しており、和太鼓を学ぶためのモチベーションは高いものと思われる。

『小学校学習指導要領解説 音楽編』では、器楽分野における「技能」に関して、思いや意図にあった表現をするために教師や児童による範奏や、視聴覚教材の利用の必要性が挙げられている。筆者らは打合せをする中で、児童たちが信頼を寄せ、親近感を抱いている音楽担当教師の範奏が、より児童たちの楽器や演奏に対する興味・関心を強く引き出すと考えた。そこで、和太鼓の授業の導入として、《呼び声》(中条きのこ作曲)⁸⁾の一部を、小学校の音楽担当教諭である山崎を中心に岡林・佐野の3名で範奏することにした。

全2時間の授業内容については、岡林・坂井・佐野・南が和太鼓に関する資料⁹⁾を持ち寄り、児童たちが和太鼓を用いた音楽づくりを通して、協働して音楽活動をする楽しさを感じられ

るような授業プログラムについて話し合った。そして、表1に示したような授業内容を計画した。その後、岡林と佐野と山崎が授業実践に向けて綿密な打ち合わせを行った。

表1 小学3年生を対象としたプログラム

題材名	和太鼓の音と打ち方を知り、演奏を楽しもう
題材の目標	・協働して音楽活動をする楽しさを感じる ・和太鼓の音に触れ、音を出して楽しむ
第1時の計画内容	① 教師の範奏を聴く。 ② 太鼓の打ち方を学び、音の違いに気づく。 ③ 8拍で構成された4種のリズムフレーズを、口唱歌を唱えながら打つ。 ④ 4種のリズムフレーズから2つを選んでワークシートに書き、かけ声を入れる。 ⑤ 2つのリズムフレーズを選んだ理由をワークシートに書き入れる。
第2時の計画内容	① グループに分かれ、選んだ2種のリズムを椅子を打ちながらつなげる練習をする。 ② ①ができたグループから、太鼓で練習する。 ③ グループ発表を行う。 ④ 振り返りシートを書く。

3. 授業の様子

3.1 第1時の様子

第1時では、導入とした教師の範奏が始まると(図4)、児童たちは驚いたような表情や笑顔を見せながら聴いていた。「♪/ハッ/♪/ハッ」と、力強い掛け声が入ると、子どもたちから笑い声が挙がった。また、曲の終わりに山崎を中心として筆者ら3名が「ヤー！」とバチを突き出すポーズを決めると、児童たちは笑いながら拍手をした。

続いて太鼓を打つための腕の動かし方を学び、全員で図1の1)の8拍のリズムを「ドン、ドン、ドン、ドン/ドン、ドン、ドン、●」という口唱歌を唱えながら、右手のみ、左手のみ、両手交互という段階を踏んで、打つ練習を進めた。太鼓6台を横一列に並べ、児童たちは

予め一人ひとりがバチを手にして縦に並び、数回打つと、次の児童と交代をして練習を進めた(図5)。



図4 筆者ら3名による範奏



図5 太鼓の打ち方を学ぶ

少しずつ太鼓に慣れてきたところで、図1の2)～4)の3種類のリズムパターンを、口唱歌とともに順番に打った。3月に入り短縮授業となったため、ワークシート課題である2つのリズムフレーズを選んで選択理由を記入する時間がなくなり、ワークシートを宿題とした。

3.2 第2時の様子

第2時では、6～7人ずつで6つのグループを作り、宿題の2種のリズムフレーズをつなげて、グループのメンバーで一つの曲としてまとめることにした。曲の始まりと、一人ひとりのリズムの間には、必ずリズムフレーズ1)「ドン、ドン、ドン、ドン/ドン、ドン、ドン、●」をつなぎとして入れることをルールとした。児童たちは、どの順番でそれぞれのフレーズをつなげるのがよいかを真剣に話し合い(図6)、口唱歌を唱えながら太鼓の代わりに椅子を打って、チームワークよく、楽しそうに練習を始め

た(図7)。練習後のグループ発表(図8)では、「ソーレ」の掛け声で息を合わせて始める工夫もみられた。振り返りシートへの記入は第1時と同様に宿題とした。

3.3 授業者の感想

本研究の2回にわたる授業実践者である山崎は、授業の感想を表2のようにまとめている。その内容からは、児童一人ひとりが和太鼓に触れる機会を得て(表2①)、打ち方の基本を学ぶことにより演奏の姿勢に意識を向けられたこと(表2②)、音の響きや振動を身近に感じて演奏できたことを、授業者は貴重な経験としてとらえていることが読み取れる(表2③)。また、2年生時の祇園囃子の授業内容が児童の記憶に留まり、3年生の和太鼓の授業へと広がりをもたせたことへの評価も認められる(表2④)。

一方、2月末に全校音楽会があり、その練習のために和太鼓の実践日が3月の短縮授業期間になったため、グループ活動において十分な時間を確保することができず、児童の学習を深めることができなかったことに対して、残念な思いが生じている(表2⑧)。

表2 授業者の感想

- ① 小学校では和太鼓の数に限りがあるので、この度は楽器を複数台借りることができ、児童全員が和太鼓に触れることができてよかった。
- ② 和太鼓を打つ基本姿勢を指導することにより、姿勢を意識して打つ児童の姿が見られた。
- ③ 和太鼓の音による振動や響きが大きく感じられ、児童にとって貴重な経験となった。
- ④ 2年生の夏に行った祇園祭の授業をよく覚えている児童が多く、2年生から3年生へとつながりをもって授業を展開することができたと思う。
- ⑤ 例示した4つのリズムパターンをすぐに覚えることができ、よく演奏できていた。
- ⑥ 宿題にしたプリントにも丁寧に取り組んでいた。
- ⑦ プリントのリズムづくりでは、自分のオ

リジナルリズムを考えてきた児童に一部、拍数が足りていない場合があり、グループ演奏の際にうまく次へと繋がらなかった。

- ⑧ グループでの活動にもう少し時間がとればよかったと思う。1組では、リズムパターン2つ分を設定時間内に覚えられず、中途半端な発表になったグループがあったことが残念である。2組では、プリントを見てもよいことにしたが、かえってプリントばかりに目がいきってしまい、体全体を使っての思い切った発表ができなかったことが残念である。
- ⑨ かけ声については、もう少し言葉の種類が増えてほしかった。



図6 リズムフレーズの順番を話し合う



図7 椅子を打って練習をする



図8 息を合わせてグループ発表をする

4. 結果と考察

本章では、児童が提出したワークシートと振り返りシートの内容より、和太鼓を用いた試みを通して協働的な学びが育まれたのかを検証する。

また、和太鼓を用いた音楽づくりにおいて、児童がどのような気づきを得たのか、さらに、どのような思いでリズムパターンをつなげたり、オリジナルなリズムで音楽を作ろうとしていたのかを考察する。

4.1 和太鼓を用いた音楽づくりの授業において、協働的な学びははぐくまれたか

ワークシートでは、「和太鼓を学習してどんなことを感じましたか」という授業の感想に加え、「工夫したところ」「面白かったところ・楽しかったところ」「難しかったところ」の3点の記入を求めた。ここでは後者3点について「協働的な学びの育ち」を分析の視点として、考察を進める。

1) 工夫点の記述より

図9と図10は、ワークシートの「工夫したところ」に児童が記入した内容の抜粋である。また表3は、工夫点について記述された内容を「協働的な学び」を視点としてまとめた一覧である。これらには「みんなで」「みんなと」「全員」などの言葉が多くみられる。さらに、「友だちと協力して」(表3①)、「息を合わせる」(表3②)、「かけ声を合わせる」(表3③)などの文章からは、児童が個々にではなく、グループで課題を共有して「対話的な学び」が成立していることが見て取れる。

表3 児童が工夫した点について

児童が工夫したところ
①リズムを作ったとき <u>友だちと協力して</u> 、リズムをかくにんしました。
②みんなと <u>いきをあわせた</u> ところ。
③みんなで音をあわせるときに、 <u>かけ声をあわせる</u> と、もっと音を <u>みんなであわせる</u> ことができると思ったから、くふうしました。
④全員のリズムにあわせる

【くふうしたところ】
みんなと音をそろえてたたきました。

図9 工夫点についての児童の記述内容①

【くふうしたところ】
みんなで心を一つにしてえんそうしました。

図10 工夫点についての児童の記述内容②

2) 面白かった点・楽しかった点の記述より

面白かった点・楽しかった点の欄では、「協働して音楽すること」に関する多くの記述がみられた。図11～13はワークシートの面白かった点・楽しかった点に関する児童の記述の抜粋である。また、表4は、ワークシートの楽しかった点に記述された協働的な内容の一覧である。

図11の「はんで練習したときにぴったり合うとうれしかった」という記述には、友だちとリズムや呼吸が合うことの嬉しさや楽しさが表れている。

【おもしかったところ・楽しかったところ】
はんで練習したときにぴったり合うとうれしかったです。

図11 楽しかった点についての児童の記述内容①

また、図12の「リズムがみんな違う」という記述には、クラスメイトが表現しようとするリズムの違いに気づきを得ていることが読み取れる。

続く図13の「みんなに見られながら演奏しました」という記述には、児童が、仲間の前で演奏することの喜びやリズムが合う心地よさ、音が重なる面白さなどを感じていることが読み取れる。

【おもしかったところ・楽しかったところ】
リズムがみんなちがうくて、一人ずつ、ひびいていました。

図12 楽しかった点についての児童の記述内容②

【おもしかったところ・楽しかったところ】
みんなに見られながらえんそうしました。そのときみんなとリズムを合わせる時、はてたいたうすくらい大きい音がしました。えんそうがよかったです。

図13 楽しかった点についての児童の記述内容③

次の表4では、①の「グループの人と意見を出し合って」という記述に、児童が互いに対話をして交流を深めながら、学びを進めているこ

とが見て取れる。また、表4でも「みんな」という言葉が多くみられ(表4②, ③, ④, ⑤), 児童たちに、クラスの中で学ぶことの意義が自然に理解されているものと考えられる。

表4 面白かった点・楽しかった点について

- ① グループの人と、「ここは～にしよう」と意見を出し合って、和だいをたたきことができたことです。
- ② はんのみんなでえんそうしたことです。とくに、さい後にした「ヤー」のポーズをとるところが楽しかったです。
- ③ みんなと和だいのあわせる練習がとても楽しかったです。本ばんは、一人がしゃべいしても、みんながあわしてたいこをたたきました。それは練習していたからできたんだと思います。
- ④ 楽しかったことは、自分が考えた合そうを、みんなの前でたたいたことです。
- ⑤ みんなのを聞いているといろいろなリズムが聞けて楽しかったです。
- ⑥ 40人の人のたいこの音を聞いたことが楽しかった。
- ⑦ 他の人がたたくと、床がしん動して、お祭りをしているようになるところがおもしろかったです。
- ⑧ 音を聞いていると、いろいろな声が聞こえて来て、面白かったです。

また、「自分が考えた合そうをみんなの前でたたき」(表4④)ことや、「みんなの…いろいろなリズム」(表4⑤), 「40人のたいこの音を聞いたこと」(表4⑥), 「他の人がたたくと」(表4⑦), 「いろいろな声が聞こえて」(表4⑧)などは、児童がそれぞれに集団の中で同じクラスの一人ひとりの多様な表現をとらえ、共感したり共有しているとみなせるであろう。

3) 難しかった点について

図14と表5は、児童たちが難しいと感じた記述をまとめたものである。ここでは、記述内容より、「みんなと合わせる」「みんなと合わない」(表5⑤), 「いきをそろえる」(表5②),

「声をあわせてかけ声をいう」(表5③)などが、難しいと感じられていることが理解できる。

【むずかしかったところ】

むずかしかったところは、みんなであわせることです。

図14 難しかった点についての児童の記述内容

表5 難しかった点について

- ① さいごにみんなで、ポーズをとるところです。みんなでポーズがちがうのでむずかしかったです。
- ② いきをそろえることがむずかしかった。
- ③ みんなでいっしょに声をあわせて(ソレ)とかのかけ声をいうのがむずかしかったです。
- ④ みんなでえんそうすると、音がバラバラになって、少しだけむずかしかったです。
- ⑤ 「なかなかみんなと合わなくて少しむずかしかったです。

一方、ここで難しいと挙げられた内容は、先の工夫点や楽しかった点での記述にも挙げられている。つまり、授業において、児童は友だちと言葉や音、音楽によるコミュニケーションを図って交流し、共感することや共有することを試み、協働的な学びを深めようとしているといえる。それがうまくいったときは、楽しさや面白さ、嬉しさや工夫した達成感などが得られるが、うまくいかなかったときには、難しさややりにくさを感じているといえるだろう。

これまでの分析や考察より、和太鼓を用いた音楽づくりの授業において、協働的な学びは育まれていたといえる。

4.2 和太鼓を用いた授業において、児童たちはどのような気づきを得たのか

1) 和太鼓の音の大きさと響きへの気づき

児童たちの感想には、和太鼓について述べられたものが最も多かった。なかでも、78名中49名の児童たちが、和太鼓の音が大きいことや振動が伝わって来たこと、よく響くことを述べていて、まずは和太鼓の音やその響きに魅せら

れていたことがわかる。「ふつうのたいこの音の大きさよりも和だいの音のほうが大きかったです」「和だいは小だいのことくらべものにもならないと感じました」のように、ふだんよく耳にしている小太鼓と比べた意見もあった。「工夫したところ」の項目でも、「たいこをたたいた後にすぐにパチを上げるところ」「力づよくできるだけたたいて、かっこよくできるようにちょうせんして和だいをたたいてみました」「はしでもだめなので、まん中をたたくようにしました」など、和太鼓をしっかりと響かせ、迫力のある音が出るように自分なりに工夫して演奏したことが述べられている。また、以前学んだ祇園祭などのお祭りに言及した児童が8名いた。このことから、児童たちは祭りをイメージして、初めての和太鼓を響かせようと、前向きに活動に取り組んでいたことがわかる。

2) 和太鼓の音の性質への気づき

和太鼓そのものの音については、強弱への気づきを述べた児童が16名、音の高さへの気づきを述べた児童が2名いた。「おもしろかったところ・たのしかったところ」の項目でも、「打ち方によって音が変わったところ」「ドオンやドンなどいろんな音がでるところ」と述べられており、「工夫したところ」についても、「ドンは、力づよくたたいて、コは少しだけ力を入れてたたく」のように、音の大きさを工夫しようとしている児童がいたことがわかる。児童たちは普段よく使っている小太鼓と違う和太鼓の音の性質に気づき、主体的に工夫してリズムをつくって演奏していたことが推測される。そして、児童たちを音の性質の理解へと導いたのは、西洋音楽においてリズムを取るときの一律な「タン」や「タタ」ではなく、「ドコドコ」「ドコンコ」といった日本人の伝統的な口唱歌であろう。

4.3 児童たちはどのような思いをもって音楽を作ろうとしていたか

1) リズムフレーズを選ぶ活動について

次に、四つのリズムフレーズから二つを選ぶ活動について、それを選んだ理由について見てみよう。第一に、二つのリズムのつながりに着

目した児童たちがいた。2)と3)を選んだ児童のうち7名、1)と3)の組合せを選んだ児童のうち3名、2)と4)の組合せを選んだ児童のうち2名、3)と4)の組合せを選んだ1名は、「二つのリズムが似ている」という点に着目した。例えば、2)と3)を選んだA児は「♪のリズムが多いから、2)の続きが3)のように感じる」と、B児は「二つのリズムが似ている方が、いわ感がなく聞き心地よいリズムが作れると思い、ちょっと似ている2)と3)を選びました」(図15)と答えている。

■みなさんも作ってみましょう。
選んだ番号 (2) と (3)

選んだリズムを聞いてみよう。かけ声を考えて、考えて入れてみよう。
ドン、ドコ、を使って、自分でリズムを作ってもいいです。

2つのリズムを選んだ理由
2つのリズムが似ている方がいわ感がなく聞き心地よいリズムが作れると思い、ちょっと似ている2)と3)を選びました。

図15 2)と3)のリズムを選んだ理由

このように、それぞれのリズムの特徴に気づいて、スムーズにつなげることを意図した児童たちもいた。

第二に、全体の構成に言及した理由が見られた。例えば、2)と4)の組合せを選んだC児と1)と4)の組合せを選んだD児は、だんだん盛り上げていくことを挙げている(図16)。

■みなさんも作ってみましょう。
選んだ番号 (2) と (4)

選んだリズムを聞いてみよう。かけ声を考えて、考えて入れてみよう。
ドン、ドコ、を使って、自分でリズムを作ってもいいです。

2つのリズムを選んだ理由
だんだん盛り上げていくようにしたいから

図16 2)と4)のリズムを選んだ理由

また、1)と2)の組合せを選んだE児と1)と3)を選んだF児は、最初の方は簡単

で最後の方は難しくすることを挙げている。「難しく」と表現されているが、4分音符だけで構成された1)のリズムよりも音が増えていくため、これらの4名は終わりに向って盛り上がる構成を意図したと考えられる。逆に、4)と1)の組合せを選んだG児は、「リズムフレーズ1)を最後に入れたらいいリズムになると思った」と述べ、4)と3)の組合せを選んだH児は、「さいごに、「♪♪♪」と同じ音が3つならぶ方が、ノリがいい」と書いており、最後の終わり方を考えている。

以上のように、児童からは音を音楽にする過程、つまり構成を工夫しようとする姿が見られた。今回は単に音を並べるだけではなく、ある程度まとまったリズムフレーズを提示し、選ぶ課題であった。児童は、リズムフレーズを練習して身につけていたからこそ、それを吟味して選び、主体的に音楽の仕組みを考えることができたのであろう。その他、お祭りみたいという理由で2)と3)を選んだ児童が1名、3)と1)を選んだ児童が2名であった。

2) リズムの創作について

二つのリズムフレーズを選ぶ活動とともに、19名の児童たちが、部分的なものも含め、オリジナルのリズムをつくっていた。そのうちの6名は、例えば、「ドンドンドンドコ ドンドンドン あそれ」(図17)のように、口唱歌のみで記している。ここからも、口唱歌を用いたことが記譜の垣根を取り除いたと推察される。

ドントドントドコドンドンドン(あそれ)

図17 口唱歌のみを記した譜例

上記の例のように、オリジナルのリズムにはワークシートで叩いたリズムフレーズの中のリズムが含まれており、最初にリズムフレーズを唱えて演奏した経験が重要であったことは言うまでもないだろう。

5. 今後に向けて

本稿では、和太鼓を用いて試みる音楽づくりのプログラムを通して、小学校第3学年の児童

たちに協働的な学びが育まれるのかを、授業のワークシートと振り返りシートの内容を分析することによって検証した。また、和太鼓を用いた音楽づくりにおいて、児童がどのような気づきを得たのか、さらに、どのような思いでリズムパターンをつなげて音楽を作ろうしたのかを考察した。

筆者らは対象児たちと幼稚園年長時から関わりをもち、3年が過ぎた。児童たちは和太鼓を打つのは初めてだったが、和楽器を前にして主体的にかつ意欲的に表現活動に取り組んでいた。また、昨年度の7月に行った祇園囃子の授業についても多くの児童が記憶に留めてくれた。この度の実践が、我々が目指している乳幼児期からの音楽的素地づくりとして、対象児童に根づいてほしいと願い、今後も地道に研究を継続していきたいと思う。

註

- 1) 文部科学省(2018年7月)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』東洋館出版社 p.6.
- 2) 前掲書1) p.8.
- 3) 権藤敦子(2019)「学校教育と民族音楽文化の関係性(2)」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部、第68号、pp.49-56.
- 4) 研究成果としては、①岡林典子・難波正明・佐野仁美・坂井康子・南夏世(2015)「幼小の子どもを育ちをつなぐ音楽活動の試み-遊び歌《しゅりけんになんじゃ》の実践をもとに-」『関西楽理研究』XXX II, pp.41-52, ②佐野仁美・岡林典子・坂井康子(2016)「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び-絵本を用いた実践をもとに-」『関西楽理研究』XXX III, pp.15-31, ③佐野仁美・岡林典子・小畑郁男・土田圭子(2020)「小学校低学年における旋律づくりの試み-音楽的イデオロムに着目した実践の可能性-」『関西楽理研究』XXX VII, pp.1-17, ④岡林典子・佐野仁美・坂井康子・辻誠・深澤素子(2019)「領域「表現」と小学校音楽科をつなぐ和楽器を用いた活動の試み」『京都女子大学発達教育学部紀要』第15号、pp.109-119, ⑤岡林典子・佐野仁美・坂井康子(2021)「和楽器を用いた表現活動において育まれる力-幼稚園年中児のオノマトペの表現に注目して-」『関西楽理研究』XXX VIII, pp.21-38, などがある。
- 5) 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・難波正明・南夏世・山崎菜央・深澤素子(2018)「領域『表

現』と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性
- 『マラカス作り』によるオノマトペ表現と
協同性の成り立ちに注目して-』『京都女子大
学発達教育学部紀要』第14号(1), pp.115-
124.

- 6) 前掲書4)の④
- 7) 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・南夏世・山
崎菜央(2021)「幼小をつなぐ音楽教育のプ
ログラム開発-『祇園囃子』を教材として」
『京都女子大学発達教育学部紀要』第17号,
pp.143-152.
- 8) 岡林は2019年より和太鼓の指導を受けており,
2021年3月28日に発表会で《呼び声》を演
奏する準備をしていたので、山崎、佐野に曲
を紹介して、3名で練習を重ねた。
- 9) ①花井清編著『音楽科教育における和楽器に
よるアンサンブル』(1988)全音楽譜出版社,
②全日本音楽教育連盟編『子供和太鼓合奏指
導』(1989)全音楽譜出版社, ③小島律子・澤
田篤子編『音楽による表現の教育-継承から
創造へ-』(1998)晃洋書房, ④島崎篤子・加
藤富美子『日本の音楽・世界の音楽 日本の
音楽編』(2014)音楽之友社, ⑤小島律子『義
務教育9年間の和楽器合奏プログラム』(2015)

黎明書房, ⑥徳丸吉彦監修/日本音楽の教育
と研究をつなぐ会編著『唱歌で学ぶ日本音楽』
(2019)音楽之友社, ⑦教育出版社『令和2
年度改訂 音楽のおくりもの2~4』, ⑧教育
芸術社『令和2年度版 小学生の音楽2~4』

謝辞

本研究に当たり、附属小学校の児童の皆さん
にご協力いただきました。記して深くお礼を申
上げます。

※本研究はJSPS(課題番号17K04889代表者:
岡林典子「協同性の育ちに着目した幼小接
続における音楽教育のプログラム開発」/課
題番号21K02478代表者:佐野仁美「表現
遊びから音楽づくり,創作へと体系化され
た音楽教育プログラムの開発」/課題番号
17K04655代表者:坂井康子「『声・ことば・
うた』の音響的・韻律的分析に基づく保育・
教育の表現活動の研究」の助成を受けている。